平成十一年一月十八日　最終講義

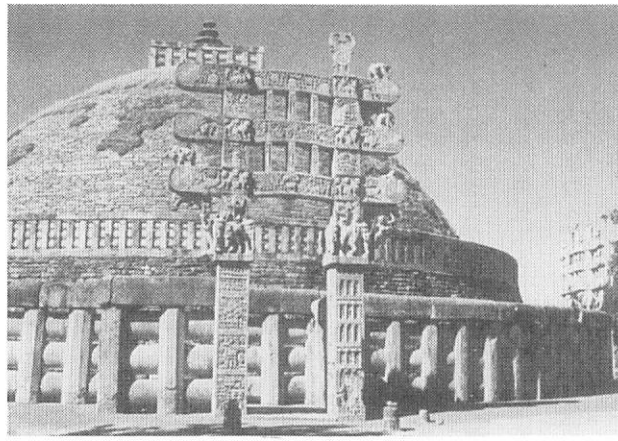
塔とサンガ

――僧伽から仏塔重視・更に仏塔否定から法の重視へ――

高橋　堯昭

非常に広範なテーマなものですから、少しはしょって、お話申し上げたいと思います。

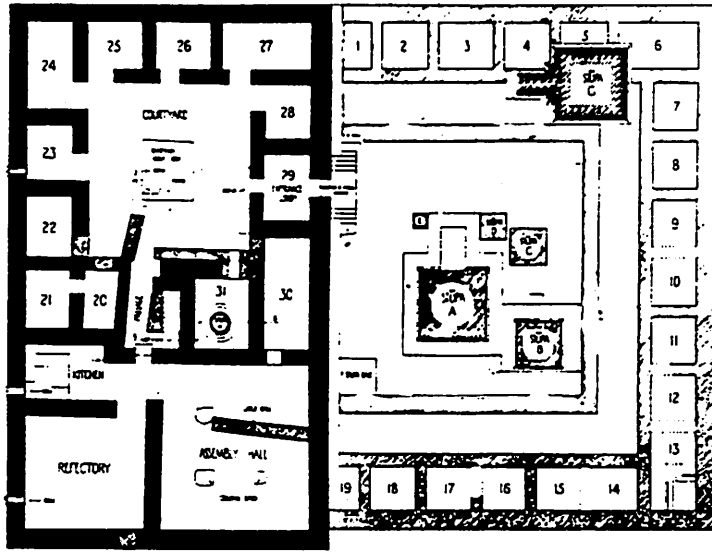
お釈迦様が亡くなられた時に、いわゆる「塔」を造る習慣は無かったわけです。わずかに「土饅頭」を作って中に葬った。然も塔は在家の人が、それを供養したわけです。「阿難よ、汝は舎利供養に奉仕してはならない。最高善の為に供養せよ。信心厚き刹帝利の賢者、婆羅門の賢者居士ありて舎利を供養するであろう」（大般涅槃経）ということですね、塔供養は坊さんの仕事じゃなかった。僧は悟りを目指したわけです。ですから、「僧中に仏あり」即ち僧院に仏がいるから、「別に塔を建って供養する必要がない」というのが仏教の原則だった。その例として、ヴァイシャリーの有名な遊女が自分のマンゴウ園を、お釈迦様に供養しようとした。そしたらお釈迦様が「私は僧中にいるから、私に特別に供養する必要はない、僧院に供養しなさい」（化地部所伝五分律第二十大二二一―一三六上）。こういったことが大原則なんです。ですからお釈迦様が亡き後、坊さんは最高善、悟りの為に努力して、塔供養というのは在家の人達の仕事だったんです。それが、何時しか変わってきた。それは人情の常として、過ぎ去って行くものは、段々

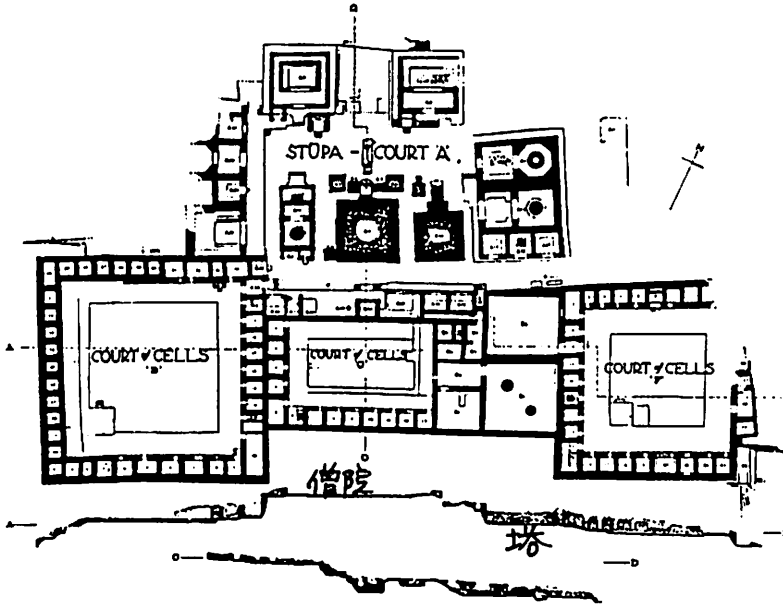


1　サンチーの第一塔（背の低い土饅頭型・ガンダーラの塔との対比）

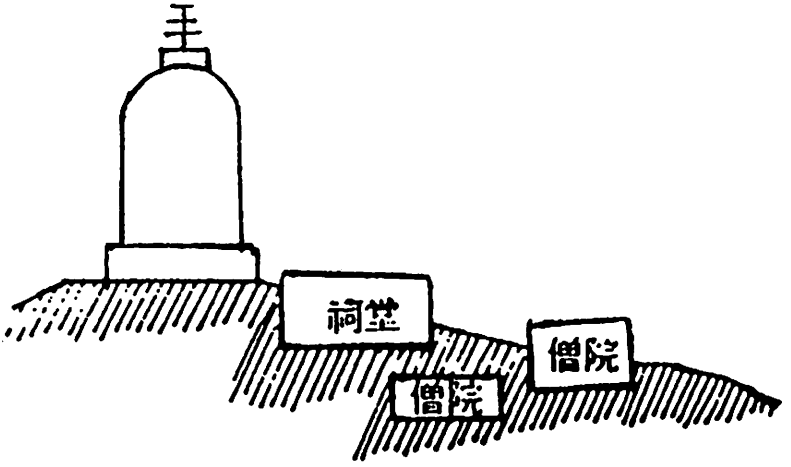
美化されてくるんです。亡くなった人が、時がたつに従っていい所のみ思い出されて来るのに似ている。今、お釈迦様を土饅頭を作って供養したと申しましたが、それは樹神地神信仰の、系譜・伝統にしたがって釈尊を供養したということです。為に何時しか塔がどんどん、どんどん大きくなっていったわけです。従って、塔信仰の増大ってことがあり、塔が大きく、大きく、増幅されていったわけです。そうなるとお釈迦さまは人間釈迦から超越者救済者になって行った。即ち、サンチーという仏塔がありますね。インドにたった一つ残る古い仏塔。このサンチーの仏塔を大きくする為に、寄付名簿に坊さんが三分の一も名前をあげている。このことは坊さんがこの仏塔の供養に関心を持ってきたことを表わしています。それは、舎利弗とか目連さんのようなエリートじゃなくて、我々のような凡僧が沢山入門して来たんです。阿含経等をみますと、借金に追い立てられ僧院に逃げ込み坊さんになったり、人を殺して僧院に逃げ込んだという例まで出ています。ですから、そういう凡人が坊さんになってくると、悟ろうとしても悟ることが出来ない。そこでお釈迦様に向かって「悟らさせて下さい」という祈りが出てきたんです。在家の人達は現世も幸せでありますように、来世も又幸せでありますようにという、所謂有への祈りをした。在家のそ

2　ピッパラ


24
25
26
27
28
29
23
22
21
20
31
30
COURTYARD
KITCHEN
REFECTORY
ASSEMBLY HALL
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
STUPA C
STUPA A
STUPA B


STUPA
COURT 'A'
COURT 'B' CELLS
COURT 'C' CELLS
COURT 'F' CELLS
僧院
塔

3　カラワン



4　ジャマールガリ

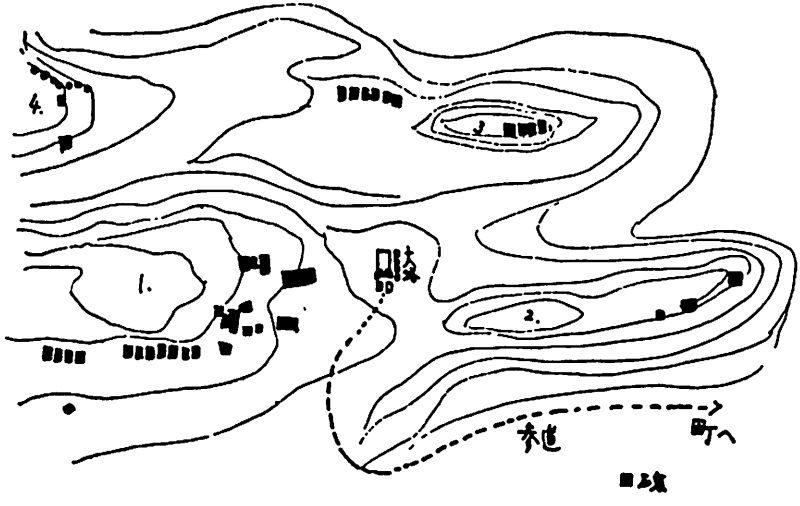
れに対して坊さん達は、悟りに早く入れますようにという祈りが出てきた。即ち「無」への祈りであった。かくて仏塔は、どんどん大きく立派になって行った。仏が超越者・救済者になって行ったからです。それだけでない、この写真2の如く、僧院の中に仏塔が入ってきたんです。然し、これが不思議な事に紀元後二世紀までで、三世紀以後はこれらはみんなとっぱられてしまうんです。これが不思議なんですね。要するに本来は別のものだった塔が僧院の中に入って来た。それだけでない。その僧院の中へ入ってた塔は、やがて又僧院の外に祀られるようになった。僧院の中から塔がとび出したのは、あまりにも仏塔信仰が盛んになったことを表しているといえます。但し、最初のうちは、カラワン（写真3）という遺跡の如く、高い所に僧院がありますと塔は一段低い所に出来ています。これは信者が町からお参りに来るので。僧院の僧の生活をさまたげないように、一段と下に塔は出来ているんです。これらは紀元二世紀。これが三世紀乃至後半になると僧院と塔の位置は逆転して来るんです。写真4の如く下に僧院があって塔が上に作られるようになるんです。即ち仏塔崇拝が、全盛期をむか

えると、僧院と仏塔の位置が逆転して来ました。僧院から仏塔へと人々の信仰の関心が移って行ったことがわかります。こういうことを念頭に入れて、これから話すことを聞いて頂きたいと思うわけです。

さて、今度は、写真5を見て頂きたい。

これはラルマといって、京都大学がアフガニスタンのジェララバードという、内戦の一番ひどい戦いのあった町、嘗て私の尋ねた時には仏教の隆盛をしのばせる遺跡や仏塔が林立していた。その仏教遺跡が全部壊されちゃったんです。その町の郊外のラルマという遺跡のレイアウトです。

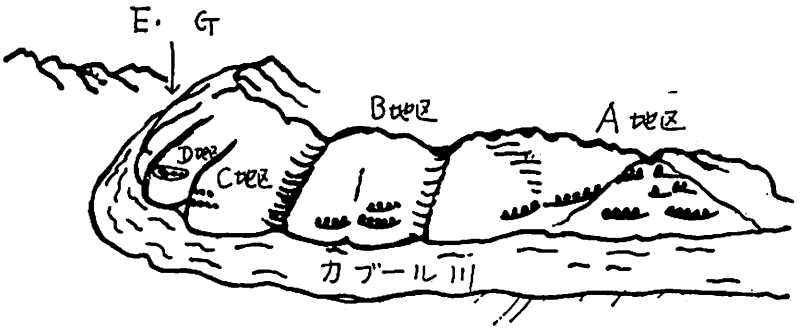
だいたい砂漠では、インドもそうですが、アフガニスタンからイスラエルまで沙漠で、生活しやすいのは洞窟なんです。だから、キリストも洞窟の馬屋で生まれたんです。というのは大陸や砂漠ですと寒暖の差がひどいでしょう。物凄く暑い時でも、洞窟の中はひんやりしてますね。そして、今度は冬の寒い時には、中で昼間のうちに焚き火をするんです。そうすると夜までに煙がおさまり、中がポカポカして暖かく非常に快適なん



5 ラルマ

です。まさに「生活の知恵」というものですね。ですから、ガンダーラからイスラエルまでは、住居は簡単な崖の横穴・洞窟なんです。このラルマでも、坊さん達は山の斜面の崖に横穴を掘って、そこで生活したんですね。そして、そこの大塔を中心に礼拝していました。大塔は町の方から来る参道で結ばれています。その頃には仏塔信仰というのは盛んになって来ています。特にこのラルマで気が付くところは、こういう山の裾々に僧院が出来るとしますと、段々中央の大塔のほかに夫々最寄りにストゥーパが出来て来るんです。その証拠として各僧院群の上に塔らしい痕跡が残っているんです。ストゥーパというと、インドのは基壇が丸く低いんです。ガンダーラのは何段にも重なって背が高くなるんです。然も基壇は四角なんです。法華経の塔は高さと底辺との差が二対一ですね。こういう背の高い塔はパキスタンのタキシラからアフガニスタンにかけての塔であって、インドにはサンチーの如き背の低い塔しかないのです。お釈迦様が亡くなった頃のは土饅頭形式のがインドです。こういうことから考えますと、法華経の塔のモデルはインドではなくガンダーラからアフガニスタンでにかけてと想像されます。即ち背の高い塔・高さと底辺とが二対一の塔というのは、パキスタンからアフガニスタンにかけてなんです。インドではないんです。まあ、こういうのを求め歩いたわけです。

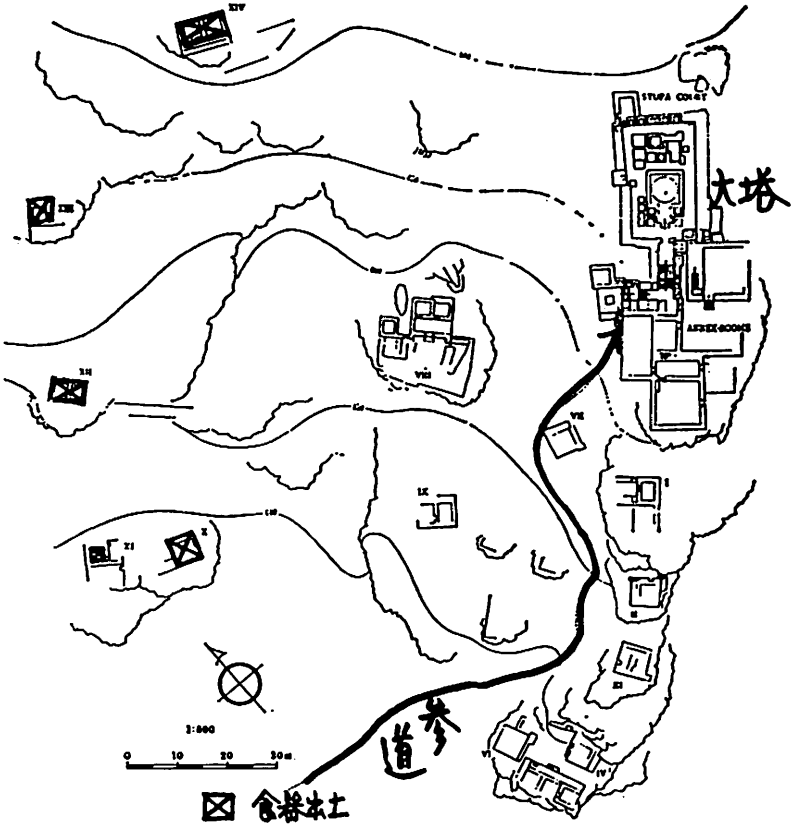
話はラルマに帰りますが、山の斜面の崖に掘られた石窟の最寄りの所に塔を建てて、近くに住む石窟の僧達はこの塔を拝み、或は他の山の斜面の石窟の僧達は別の塔を拝み、もともとは主塔を拝んでいたんですけれども、だんだん最寄りの所へ、塔を建てて拝むようになって行った。夫々の窟院の上に作られた小さな塔の痕跡が残されていることが注目されるのです。だいたいこれらは、四世紀から五世紀ぐらいにかけてです。こうなってくると、その頃分派が行われていったじゃないかというのが、このラルマという遺跡なんです。



6　バサーワル窟院群

そして次は、写真6のバサーワルの遺跡。これはアフガニスタンのジェララバードという町の手前の対岸にあるんです。国道をパキスタンからジェララバードへ向かって走って行きますと、ガブール川の対岸に山があって、その中腹に無数の石窟が掘られている。この山にはいくつかの谷があって、為に自然にいくつかの石窟の群が出来ている。六つか七つに分かれているんです。そもそもここへ行くのは大変だったんです。ドラム缶を六つ並べて、その上にポプラの木を並べて作った即製のイカダで渡るんです。急流なので、斜めに流されながら渡るんです。然し帰りが大変でした、一向にこっち岸に着かないんです。このまま行ったらアフガニスタン・パキスタンの国境を越えちゃうじゃないですか。そしたら国境警備隊に撃たれちまうと思って、あの時は本当に御題目を唱えましたよ。真剣に。そういう思い出深いのがこのバサーワルという遺跡なんです。ここの洞窟の中には三つのタイプの窟があります、即ちAは柱が恰もストゥーパのように堀残してあるんです。人々はクルクルクルクル、その周りをまわる。繞道と言いますね、お経を読みながら廻っていく、恰も塔の周りを廻る如く。この柱のある窟を方柱窟というんです。それに加えてBは、こういう柱はなくて壁にジャータカとかなんかが沢山に掘られています。ここで僧も信者も教理を学習するわけです。これが尊像窟、いわゆる学習する部屋です。そ

してもう一つのCは僧の住居。この三つの機能をもつ洞窟が、揃ってワンセットになります。その群がABCDEGというようなグループで残っています（Fは崩壊していて分からない）。そうすると、四世紀から、五世紀になってくると、ここも、教団が本格的に分化していったじゃないかと想像されます。このバサーワルで京大の発掘隊の方に「何かこの分派についての資料が出土していないだろうか」ときくと、「藤田先生という清水の出身の人、（後年、東京の博物館の副館長をやった方）その人がガンダーラのメハサンダで



7　メハサンダ

発掘しているから。高橋さん知り合いだから行って聞いてみたらどうだ。」と言われた。喜び勇んでガンダーラまで戻って来て、そして訪ねたのが、本日のメインのテーマの写真7のメハサンダなんです。

ここは、布施大師といわれた情け深い王子が、隣国が日照りで困っているのを見かねて、雨を降らす国の宝の象を無断で貸しちゃった。それで向こうは雨が降ったけれど、自分のところは雨が降らなくなってしまった。その為に大臣達に国を追われて、このメハサンダの洞窟に住んだという有名なジャータカの物語の山なんです。然もこの山でも布施大師は、目の悪い人に出遇ったら奥さんを手助けに貸してしまうし、年寄りで困っている人の手助けにと二人の子供まで貸し与えてしまう。要するに仏教の布施の権化というか、布施のシンボルを示す遺跡です。この太子のかつて住んでいた所だというのが、メハサンダの遺跡なんです。これを、ちょうど京都大学で発掘していたんです。その話をバサーワルで聞いて私は追っかけて来たんです。藤田先生は、「高橋君良いところに来たよ。今回面白いことが発見されたよ。高橋君来て見ろ。」と言われ、ついて行ったところがここの絵図なんです。とにかく中央に大塔があって、山の斜面を利用して、段々畑のように僧院がずっと上から下へ七・八戸作られている。参道は下から谷を通って、この塔へ通じているんです。谷の参道をはさんで向って左の屋根にも五、六ヶの僧院がある。ここの人達は、主塔に近い主僧院の隅の食堂と思われる所で揃って食事をしていたらしい。なぜなら、そこから茶碗だとかスプーンだとかお皿だとかというものが、わんさと出て来るんです。そしてこれ以外のところからは一つも出て来ない。そこだけしか、箸、食器が出て来ないんです。そうすると、この辺の僧達は、このメイン塔を拝みながら、ここん所で一緒に、身延山の食堂のようにみんなで食事していたわけです。問題は、これらから少しはなれた尾根の上にある僧院です、絵図に×が付けてある僧院。これはだいたい二、三人から五人は無理かな? 小さな僧院なんです。そこからはどうし

たことか、食器だけじゃなくて、甕が出て来るんです。甕っていうのはインドへ行かれた方はわかるですけど、水瓶の底を抜き、これを台の上にのっけて、下で炭や火をたくんです。そうすると、内側の壁が焼けるでしょう。ここへうどん粉を練って「ぺっ」と貼りつけるわけです。そうする両面から火が通る。これがナン。インドのパンですね。これを焼く甕まで、出て来るんです。ということは、同じ大塔を拝みながら、例えば、身延山の本堂にお参りに来る仲間でありながら、谷越えに居る連中は、食事を一緒にしてないんです。距離にして、谷があるけれど直線にすると一〇〇メートルから、一二〇メートル。ここからだと直線で端場坊さんくらいかな。そのくらいの所に居ながら、食事を一緒にしていない。食事を一緒にしていないということは、同じグループではないということなんです。小乗仏教と大乗仏教では食べ物が違うんですよ。即ち本来は大乗仏教は全く生臭は食べないというのが原則です。然し小乗仏教は出された物は、その中に肉があろうと魚があろうとも、ありがとうと言って食べられる。自分の為に殺したものでない限り、自分の為に殺すのを目撃したもの、否その話をきかない限り食べられる。そういう見地からすると、メハサンダの主僧院は、碑銘から経量部という小乗仏教の一派の僧院なんですから食事を共にしないグループは小乗じゃないグループということが想像されるわけなんです。

私は長年、大乗仏典の中にある種々の迫害の表現、即ち「じっと我慢せよ」「忍耐せよ」とかの異常な強調を考えて来たのでメハサンダという山の境内の一部、所謂廂をかりて自らの僧院を作った「食事を共にしないグループ」の存在を知り長年の疑問が「目から鱗の落ちる思い」がした。あんな感激の日はなかったですね。生涯で忘れられない遺跡の一日でもあったんです。更には長年疑問に思っていた経典の文章を考える上でも示唆を与えられたんです。即ち「一切の二乗の儀式を行ずると現じて、内々には諸々の菩薩の行を捨てず」と。（首楞厳三昧経（大一五―六三一））、

又、大乗仏典宝積経郁迦長者経（二七八頁、筑摩書房）には「彼は僧院に入ったら、誰が多くを学んだ比丘か、だれがよく法を説く比丘か、だれがよく戒律を保つ比丘か、誰が戒律の要綱を保持する比丘か、だれが菩薩を保持する比丘か、だれが三昧にいそしむ比丘か、だれが菩薩乗の比丘か」（傍線筆者）と小乗僧院の中にこっそり大乗に心をよせる者が出て来ていることがわかる。これは又、メハサンダのように境内に住むものも同様であったであろうと思われます。そもそもガンダーラの寺々のほとんどは、みんな小乗仏教の寺だったんです。何故なら、「有部に受納された」とか、「経量部に受納された」とか、みんな宛名がついた碑名が出ているんです。そういう中で「大乗仏教の寺」へというのはほとんど無いんです。私は四十回ガンダーラを歩き碑銘を調べ続けて来ましたけど、ほとんど大乗らしい寺は無いんです。それで、元東大教授の平川彰先生にその話をしたら、「何々に受納されたという、宛名のないのが、あるいは大乗の始まりじゃなかったかな、大乗は無を志向するから所有者を書かないから」と、平川博士がおっしゃったんです。その宛名のないのが大乗かもしれないというけど、とにかく、ちょっとした立派な寺は全部小乗仏教の寺です。その小乗仏教のお寺の中で、「表面は小乗の行を行ずるように見せても、内々には大乗に心を寄せている人がいる」という前述のお経本があるくらいだから、そういう僧もこのメハサンダに居たに違いないと思うんです。恰も身延の山の中で修行しながら、即ち表面的には身延山で南無妙法蓮華経と真面目にやっているように見せても、内々にはアミダさんを信じている如く。これは一つの例えですがね。そういうことをこの経文の文字は言っていると思うんです。この郁迦長者経という経文には、「僧院に入ったら、よく戒律を保つ比丘か、あるいは菩薩を保持する比丘か、あるいは菩薩乗の比丘か、よくみくらべろ」といってますからね。そうすると、このメハサンダの小乗仏教のお寺の境内に居ながら、大乗に心を寄せている人がもう出はじめていたということを、食事を共にしないグ

ループはあらわしているんじゃないのかと考えるわけです。即ちこの食事を共にしない僧達はあるいは大乗に心を寄せている人じゃなかったか、あるいは違う部派の人かもしれないけれども、とにかくここの主僧院の僧達と意見を異にするグループだったということが、このメハサンダの遺跡からわかるわけです。

そもその大乗のはしりの人々はどこを據点としていたのでしょうか。

阿仏国経徳号法経（大一一―七六三下―七六四上）に「出家の菩薩がこの経を求めて白家の家に居ても過失はない。又この経巻を受持諷誦する菩薩がいると聞けば遠方であっても出て行って、この経巻を供養し或いは許可を得て書写すべきである」（傍線筆者）とあるから、大乗のはしりの拠点というのはお寺ではなくて、いわゆる在家の家であるということがわかる。そういう在家の教えを僧院の僧の中で、、「表面は小乗の戒律を守っているように見えても内心では大乗に心を寄せる」僧が出てきて、段々大乗の方に傾いて行ったんじゃないかと、メハサンダの山に坐りながら、「食事を共にしない僧院と主僧院の僧、そしてこれらの経典」とを考えあわせて想像をたくましくして来たわけです。

時間がないので急ぎますが、今、袈裟を掛けている人達は、坊さんになる人だろうが、こういう人達、法華経を読んで、勧持品を読み、どう思う。あの中では切実な文章が充ち満ちているじゃないですか。法華経だけでなく、宝積経にしても、或いは八千頌般若経にしてもですね、切実な文章が沢山あるわけです。要するにこの経は「心の知れた、気心のわかった人に、こっそりと説けよ」とかいう言葉が充ち満ちている。或いは「じっと我慢しようよ」とか。ですから私はメハサンダの地図に照らし合わせて、これらが、もし大乗のグループであったとするならば、例えばこういう身延山の中に居るんだったら身延山の規則に従って、「じっと我慢しようよ。」と。心は内々に大乗に心を寄せて

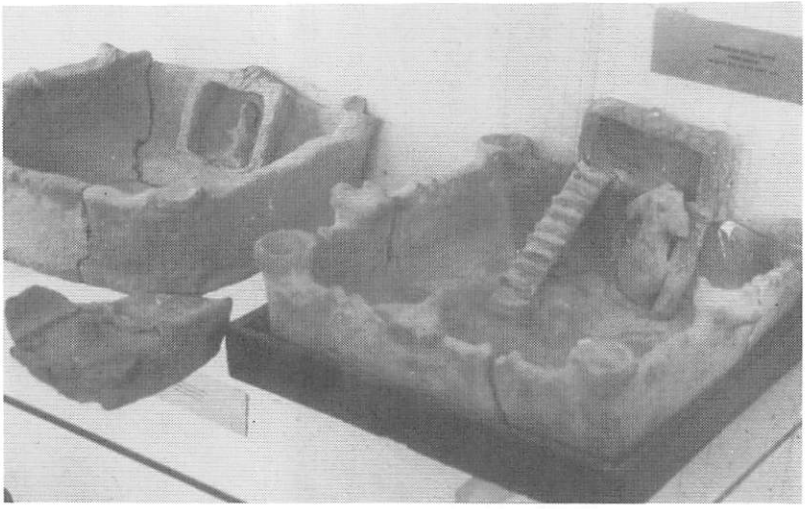
いるけれども、メハサンダの本院の人達を刺激しないようにしようよ。じっと我慢しようよ。」との態度をとる筈だと思う。即ち「彼等は激しく欠点をいいつのることもない。更に他の声聞に属する比丘たちの名をあげて非難することもなく、誉めだてすることもなく、彼等に敵対心をいだくこともない」（大乗仏典法華経下六九頁）「この経典を愚かな人の前では、けっして説いてはならない」（岩波文庫法華経上二一七頁）「誰かに悪口を言ってはならない。異なった見解を述べてはならない」（仝二六五頁）「この経典を秘かにかくれてでも、あるいは誰か一人の人の為に説き明かすなら・・・・・・」（仝一四七頁）以上のような切実な文章というのは、こういう立場を表しているんじゃないのかなとメハサンダの僧院分布図が暗示していると思うのです。やがて、新興教団が力を得て来て、自信を持って来ると攻撃に出る。これがあまり高飛車で、「小乗なんて悟ることはできないよ。大乗じゃなきゃだめだよ」なんてことになる。即ち「良家の子等よ。あなた方はこの上もない正しい菩提から遠くはなれ、あなた方は、それ（菩提）にあらわれることはない。かの如来の知をさとることは出来ない」（大乗仏典法華経七二頁）「人里はなれた所に居を占めて、在家とも出家とも交らず、ことば少なく、談合することも多くはない。しかしこの沙門のこのような行住坐臥は供養者をあざむく口先だけの欺瞞の産物にほかならない。心を清めるためでもなく、静けさや寂けさを得るためのものでなく、修練のためのものでもない」（大乗仏典宝積経迦葉品九〇頁）「出家していながら、彼等が欲求することはなはだしく、『けっして愛欲にふけってはならない。それはおん身等を畜生や餓鬼や地獄の境涯におとすものである』と常に在家者に説くが、彼自身の心は少しくも自制されていない」（迦葉品一七四頁）「知恵劣るものたちは、森林での生活（阿練若）を守り、ぼろをつずった衣（納衣）をまとっただけで、『我々は耐えの生活をしている』と言うでしょう」（岩波文庫法華経中勧持品二三六頁）と高飛車に小乗を攻撃する経典の文章が出て来るんです。こうな

ると、小乗側だってだまってはいない。かくて「常に大衆の中にあって、我等を毀らんと欲するが故に国王婆羅門居士及び余の比丘衆に向かって誹謗して我が悪を説いて、是邪見の人外道の論議を説く」とか「ヤクシヤの形相をした多くの比丘たちが私どもを罵倒しよう」「眉をひそめられたり、くり返し、何度も（座席）を割り当てられなかったり、精舎から追い出されたり、種々の悪口雑言をあびせられ・・・・・」（大乗仏典法華経二―六〇頁）とかの即ち勧持品の有名な「数々見擯出。遠離塔寺」の文字である。これも至極当然の話である。他派の山の中（僧院の中）に住んで居るんですもの。だから、そういう点で宝積経だとか法華経だとか、八千頌般若経にある切実な文章は、こういうように他人の廂を借りて段々大きくなって行く大乗の発展のプロセスをメハサンダの遺跡で感ずるわけです。（傍線筆者）

とにかく、法華経とか八千頌般若経にしても大乗は、仏塔信仰が隆盛になって、一世を風靡している中で起って来たわけです。山という山をおおうが如き華麗豪荘な仏塔が林立する中で新興の教団たる大乗のはしりのグループは、そういうものは持っていない。山の上には仏塔が並んでいるけれども、自分達は白衣の小さな在家の中で、ひっそりと修行している。だから負け惜しみというわけではないが、執拗に既成教団を攻撃する。「在家の無知の衆生に善根を植えさしめんが為に舎利を供養せんことを説けるに、かのもろもろの痴人、我が意を解せず、唯この業をなすのみ」（宝積経大一一―五〇七中）と宝積経がこういっているわけです。要するに「ひとつの方便として塔を供養しろと、私（お釈迦様）は言ったけれども、彼らはそれしか行っていないで、本来のことをしていない。あれは間違っている」という立場を、経典は表している。商人富豪はものすごい僧院を布施している。そのそびえ立つ大塔を前にして、庶民達は塔供養したくたって、寄附出来ません。とてもそんな真似は出来ないでしょう。そこで在家の人達はどうした

かというと、「冗談じゃないよ、塔の所に仏様が居られるんじゃないんだよ。『この知恵の完成が世間に流布している限り、如来は（そこに）存在すると知り』（八千頌般若経第三章）即ちこの知恵の完成は般若波羅蜜多、即ちお釈迦様の教えの存在するところに仏が居られるんだよ。だから塔の所に仏が居るんじゃなくて、法のある所に仏が居られるんだ」よと。法華経だってそうですよ。たとえば「一偈でも受持読誦解説書写すれば、そこに仏が居られるし、『仏の衣に包まれる』（勧持品）」と言ってるじゃないですか。こういう立場、いわゆる小乗仏教の仏塔教団に対して、何もない一般の庶民が、「経典のあるところに仏様が居られるんだよ」という立場を強調してくるわけです。ですから僧院から塔へ行った信仰の流れが、今度はその仏塔を否定して、経典信仰へ、いわゆる経典のあるところに仏様が居られる。という立場に変わっていくんですね。ちょうどその時代風潮は、後にお話しますように仏教だけじゃないんです。その時代は、二世紀から三世紀頃です。

二世紀から三世紀・四世紀っていうのはシルクロードの通商がものすごく栄えた時代なんです。特にクシャンのフヴィジカ王のコインに銭袋をもったファロー神が何種類もある。それは金融資本の隆盛を示している。これ程通商の繁栄を示しているといえるんです。その為に金持ちは、うんと金が儲かった。金持ちが儲かって、そして、それを「俺はこれだけ金があるぞ」ということで、塔を建てたり僧院を建てたりしたんです。一般の人達と、金持ちと貧富の差がものすごく出た時代なんです。為に生まれによるカーストより以外に貧富という差別まで出て来たということ、それはムケルジーとかヤダーバというインドの有名な学者の論文があるんですが、仏教の経典の中には、梵志額波羅延問種経という経典（大一―八七七上）に「バラモンがクシャトリアを娶って、そして、子どもを産ませたり、スードラという奴隷がバラモンの女を娶って子どもを産む」ような、生れから貧富の差という立場へ、社会に一層の差別



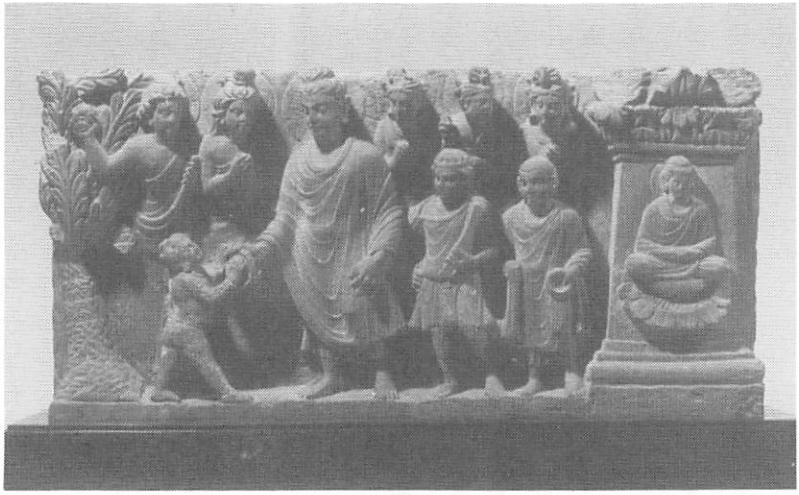
8　竜神への奉献粘土タンク

が出現して来た時代がこの時代だったんです。そうすると、貧しい者に救いの手を与える、そういう宗教が当然ここに出て来なきゃならないんです。その最たるものはこの8の写真。これはですね。水槽なんです。タンク。中に女の人が立っていて、中央にガートという階段があるんです。これは竜神信仰の水槽なんです。竜神信仰では竜神さんが住む所だから、ちょうど仏教の信者が塔を建て供養するように、池を掘って供養したんですね。これがまた、乾燥地帯だから、イリゲーション、耕作に使えるようになるんです。宗教的な功徳が同時に社会性を持っている所が注目されるわけですけど。とにかくお金持ちは大きな水槽（タンク）を寄附出来る、だけど貧しい人はそれは出来ないでしょう。従ってこういうものを奉納したんです。それが何十とタキシラの博物館の中に保存されているんです。それらは、本物のタンクの縁へ、貧しい人達が泥で作ったミニチュアのタンクを寄附したんです。要するに、「絵に描いた餅」じゃないけれど、ミニチュアでも竜神さんにあげれば功徳があるという、こうした時代風潮の

中で大乗仏教が成立し発達したんです。それに、大乗仏教の寺は小乗仏教のようにスポンサーが付いているわけでもなんでもない。貧しい人達なんです。「お前達は何も寄附しなくてもいいよ、たとえ一偈でも受持読誦解説すれば、仏の衣に覆われるんだよ」という。要するに貧しい者への救い、こういうものがこの大乗仏教発達の時代だったんですね。ですから、小乗仏教、金持ちにスポンサーになってもらって壮麗な塔を造った、その小乗仏教でさえも、やがて「閻浮提　即ちこの世の中全体の黄金よりも泥団子」、即ち真心の方が功徳があるよというようなことを、摩訶僧祇律の、「真金百千担持用行布施　不如一団泥　敬心治仏塔」（摩訶僧祇律第三十三大二二一―四九七中下）の如き文章が出来ている。要するに泥団子を持ってきて、仏様の塔に供養しただけでも功徳があるという。商人長者にたよっていた小乗仏教でさえも、大乗とか、竜神信仰の世の中に遅れまいとして、こういう文章を律蔵の後半、各部派の持っていた各律、即ち四分律・五分律・説一切有部毘奈那薬事等の後半の部分に付けたして、そういうことを言って来ている。即ち小乗仏教でも貧しい人達に手を差しのべようとしている。こういう時代がちょうど三世紀から四世紀。あの大乗が発達した時代だったんですね。その基盤は、シルクロードの通商によって貧富の差が激しくなって来た時代だった。即ち階級制度が「生まれよりも、貧富」の差に変り一層差別がひどくなって来た時代にあったと思うんです。

更に、もうひとつ付け加えますが、メハサンダで、ヒントを得たというお話を今日しているわけですけれど、法華経の塔が先程、二対一の塔だと申し上げましたね。この二対一の塔、即ち背の高い塔というのはパキスタンのタキシラからアフガニスタンへかけてしかないんです。これはインドには無いんです。しかも法華経の塔の涌現する時、塔の中には二佛が並座していた。法華経では釈迦多寶ですけれど、小乗仏教の摩訶僧祇律等では釈迦と迦葉仏です。

こんなことが書いてあるんです。「お釈迦様が歩いておられると、バラモンが耕作をしていたんです」。これは重大



9　童子泥団子供養像

なことなんですね。バラモンが農業をやっているということは、インドでは考えられないことなんです。バラモンというのは威張っていて労働なんかしない人達ですから。そのバラモンが農業をやってるんです。だから、落ちぶれたバラモンですよね。要するにここにも階級の乱れがあったということが経文から読みとれるんです。そうして、「バラモンが耕作をしていると、お釈迦様が通られたんですから鍬を置いてお釈迦様に合掌したんです。すると、お釈迦様はニコッと微笑まれた。すると弟子達は、何で微笑まれたんですかときかれた。お釈迦様が答えるには、私の足元には過去仏の迦葉仏の塔があるんだよ。あのバラモンは二仏を拝んだからだ」と言われた。「それじゃ、どうしたら迦葉仏の塔が拝めますか」と聞かれると、「あそこのバラモンに泥団子をもらってこい」と言われたんです。「そして、私の足下の迦葉仏の塔のところに供養しなさい」と。その通りにすると、そこから「高さ一ヨジャーナ、底辺半ヨジャーナの塔」が涌現して来た。そして、その後に「この世の中の全黄金よりも、たったひとつの泥団子の方が功徳があるんだよ」（摩

訶僧祇律第三十三大二二―四九七の中下）と、こう結んでいるんです。これが四分律・五分律・根本説一切有部毘奈耶薬事等、ちょっとは文章が違いますけど、ほとんど同じことが書いてあります。そうしますと法華経の発達は、こういう時代風潮・時代背景を受けているんじゃないのかなと。少なくとも高さが底辺より倍という背の高い塔のところで、法華経は成立しているのじゃないのかなと思って居ります。特に私が今持っているガンダーラ彫刻に（写真9）「子どもが泥団子を釈尊の鉢の中に供養しているのがある。その泥団子の布施をお釈迦様は喜ばれてニッコリ微笑まれた」と、「更にその子どもはその功徳によってアショカ王に生まれ変わったと言う」（阿育王経）。この彫刻が、ガンダーラで沢山出土しているんです。これが即ち、先程言いましたように、いわゆる「泥団子ひとつでも真心を持って供養すれば、百千の黄金よりも功徳がある」という考え方を象徴しているわけです。こういう同じような考え方の出てくる社会的基盤が、その頃にあったことを感ずるわけです。従って僧院から塔へ向った信仰が、そしてまた、その塔信仰が今度は又否定されて、塔よりも内心の信心、信施という。即ち信を布施する、そういうものへ変わっていくときに大乗仏教が発達し、竜神信仰が出、そして、且つまた、泥団子供養の彫刻も沢山出てくる、こういう社会的な風土があの時代。二世紀からはじまり三世紀から四、五世紀に向う時代が、そういう精神的風土の時代ではなかったかと感ずるわけです。

そういった意味で、私はメハサンダに刺激され夢中になって、あっちこっち歩いたわけです。四十回も歩くうちには、死にそうになったことも何度もありました。七十二まで生きられたということは、本当にありがたいことだと思っているわけです。特にメハサンダの山では、大きな岩を攀じ登って行ったら目の前に一メートルの大トカゲが居て、喉の皮をひくひくさせていました。これを下からのぞきびっくりしてワーと叫んだら、トカゲも驚いてのそのそと逃

げていった。こんな思い出深いメハサンダ。そこでの「塔とサンガ」「食事を共にしないグループ」の問題を最終講義としてお話させて頂いたわけです。法華経の中に、随所に出て来る、いわゆる迫害というのも、こういう小乗仏教の隆盛の中において大乗仏教が発達して行くプロセスで起るいろいろのトラブル。そしてそれに原因するいわゆる被害意識というか、そういうものが経典の中に盛り込まれて来たんじゃなかろうかなと、こんなふうにメハサンダの遺跡から想像をたくましくしてお話致したわけでございます。

御静聴感謝申し上げます。ありがとうございます。